



夏の昼間のひまわり畑は、毎日とてもにぎやかです。

「<sup>あた</sup>辺り一面、たくさんのひまわりたちが、おひさまの光の方にいっせいに顔を向けて、こがね色の力強い光を<sup>からだ</sup>身体いっばいにあびています。みんな<sup>わら</sup>笑ったり、歌ったり、楽しいおしゃべりに花を<sup>さ</sup>咲かせます。

「ああ、おひさまの光って、なんてすばらしいの」

「ぼかぼかと温かくて気持ちいいわ」

「セミのがっしょうもすてきね。あら、<sup>いっびき</sup>一匹ひどいおんちなのがいるわよ」

「虫取りに<sup>き</sup>来た子どもにつかまらないように、気をつけなさい」

ひまわりたちはクスクスと笑い合い、風にゆられてさわぎます。

その中で一本だけ、おひさまにそっぽを向いて咲いているひまわりがありました。そのひまわりは、明るすぎるおひさまの光がにがてなのです。なかまたちのそうぞうしいおしゃべりにも、うまく入っていきません。だからいつもひとりぼっちで、だまって立っているだけでした。

おひさまの光から顔をそむけたひまわりは、だんだんと元気をうしなっていました。



黄色かった花びらは茶色になってしわがより、葉っぱはたれ下がり、くきはゆがんでまっすぐ立ってられなくなりました。大きな花はささえの力がなくなって、ぐったりとうなだれています。